

日本語慣用句の語彙的な特徴に関する一考察

程 長 善

毎日、《中日新聞》を読んでいるが、数多くの慣用句が目に入る。長い文にはもちろんのこと、一行だけの見出しや300字前後の「くらしの作文」欄の短い文にも慣用句が多く使われていて、実に豊富多彩なものである。中国語には「俯拾即是」という熟語があるが、全くこれは、日常「いくらでも転がっている」ことである。メモを取り、たくさん集めているが、例として一部を挙げる。文中で慣用句の翻訳にも触れるので、対照比較と説明の便宜上、中国語訳を付け加えた。

- ①果たしていつまで“二足の草鞋”が履けるか／一身兼二职，究竟到何时
- ②政財癒着 数珠つなぎ／政財难分家，涉嫌一大串
- ③大蔵省の銀行規制にメスを入れる／向大藏省的银行章制开刀
- ④三党が足並みをそろえて解決に努力すべきだ／三党应步调一致，尽力解决
- ⑤経済発展で市場は大きくなっているのに、利益が上がらない。今、一番頭が痛い問題だ／经济发展，市场不断扩大，但经济效益不见增长，这是目前最令人头疼的问题。
- ⑥とにかく、一度体験して見るのが一番いい。高いと思っていた敷居が予想より低いことが分かってもらえると思う／总之，最好是自己亲身体验一下。原先以为入门很难，体验之后，你一定会觉得没有原先想的那么难。
- ⑦世界トップクラスのトヨタの乗用車生産技術を喉から手が出るほどほし

い／渴望得到世界一流的丰田轿车生产技术。

- ⑧村山首相の母校，明大の野球部で頑張るハーラーさんに“親善大使”としての白羽の矢が立った／活跃在村山首相的母校——“明大”棒球部的赫拉小姐被选为“友好大使”。

ほんの一部に過ぎないが，政治から経済，国際問題からスポーツ活動まで多くの面で，会話や文章表現の中では，慣用句が幅広く使われる。慣用句に使われる言葉を見ると，履物の「草鞋」と仏教用語の「数珠」もあれば，人のからだの「頭」「喉」「足」「手」などの言葉もある。

慣用句を適切に使うことによって，表現が豊かになり，しかも生き生きとしてくる。また，慣用句をよく知っていれば，他人の話や文章を十分に理解できなかったり，とんでもない誤解をしたりすることも少なくなり，それだけ言葉の理解を深めることはできるが，奥が深くてしかも大量にある慣用句は外国語としての学習者には，とても難しい対象の一つである。

本稿においては，互いに異なった言語の発想と表現を中心に，中国人学習者の目で，日本語慣用句の分類や一般性質を探り，併せて日本語慣用句の語彙的特徴について考察してみたいと思う。

1. 句括範囲が広く，使用語も豊富な日本語慣用句

かつて三省堂1991年出版の《必携 慣用句辞典》に載る慣用句について調べたことがあるが，「日常の言語生活で使用度数が高いと考えられる慣用句」はなんと3500項も収録されている。量が多いだけではなく，慣用句に使う言葉は，天文・気象や河川・山脈，動植物，人間関係，人のからだ，気持ち・心，そして暮らしなどに幅広く関係していて，日本人の生活，日本的な考え方につながる慣用句が圧倒的に多い。

以下の表は，《慣用句用例新辞典》所載の総数約1942個の慣用句を，その各々を構成している主な単語のもともとの意味によって15テーマに大別したものである。

テーマ	主な単語	慣用句数	パーセント数
① 天文・気象	天・空, 太陽, 月, 星, 雲, 雨・雷, 風, 雪など	60	3
② 地形・風景	陸地, 道, 野原, 山, 川, 海, 波, 穴	35	1.8
③ 自然のもの	土・泥, 水・湯, 氷, 火, 煙, 油	48	2.5
④ 動物	動物, 魚介類, 鳥のからだ・名前, 虫の名前	87	4.5
⑤ 植物	花, 根, 芽, 果実, 草, 木, 田畑, 植物の名前	48	2.5
⑥ 時	年月日, 時・時間, 昨日・今日, 今昔	23	1.2
⑦ 人間関係	自分, 生死・命, 年齢, 老若, 病気, 人名, 世など	103	5.3
⑧ 人のからだ	頭, 髪, 顔, 頬, 眉, 目, 手, 口, 腹, 足, 腰, 尻など	747	38
⑨ 気持ち・心	気, 心, 感情, 思慮分別, 願望, 態度, 思案, 知恵など	158	8.1
⑩ 暮らし	飯, 米, 茶, 襟・袖, 笠, 壁・棚, 車, 船, 金銭など	324	17
⑪ 神仏	神仏, 鬼・魔	32	1.6
⑫ 抽象的な物	真偽, 是非, 善悪, 有無, 勝負, 当・不当, 損得など	101	5.2
⑬ 状態	型・形, 長短, 高低, 大小, 軽重, 上下, 表裏など	94	4.8
⑭ 色	色	13	0.7
⑮ 数	一, 二, 数, 甲乙, 単位, 度・割・桁	69	3.6

中でもいちばん多いのは⑧の「人のからだ」というテーマで、全数の三分の一を上回っている。これとテーマの⑦人間関係、⑨気持ち・心、⑩暮らし、⑫抽象的な物、という人と何らかの関わりのある四つのテーマとを併せて、なんと慣用句の数は1443項に達している。これらの慣用句は日本人の意識構造や国民性の特徴を集中的に示していると言えよう。言語生活によく出てくるこのような慣用句を学生や自国民に分からせるように説明し翻訳するためには、慣用句についての討議検討は必要なことである。

2. 結合度が高い、比喩的な表現も多用の日本語慣用句

慣用句は、ただ二つ以上の単語の連結体ではない。その結び付きが比較的

に固定していて、全体で、ある特定の意味をもつ言葉である。辞書と慣用句研究の専門書は、ほぼそういう概念規定をしている。《辞林 21》(三省堂 1993)は、「2語以上が結合し、その全体が一つの意味を表すようになって固定したもの」と、《精選国語辞典》(明治書院 1995再)は、「二つ以上の語が結び付いて、習慣的に使われ、特別な意味を表す言い回し」とある。

同じ「骨を折る」という言葉でも、「体が煙突内部にぶつかりながら落ち速度が鈍ったのと下にたまっていた灰がクッションがわりになり、学生は肩の骨を折るおおけがをしたが、…」という文中の「骨を折る」は普通の言い回しで慣用句ではないが、「彼の就職のために骨を折った」というのは慣用句だというわけだ。また、「ワンクッション置く」は周知の慣用句であるが、文中の「クッションがわりになる」はただ一般連語句で、慣用句ではない。同じく、「軍配が上がる」を例としてみると、「ライバル初対決 土佐海に軍配 (が上がった)」というのは、今言っている慣用句に入らないが、「会社との工場建設をめぐる紛争はついに住民側に軍配が上がった」というのは慣用句である。

慣用句は少なくとも次のいくつかの性質を持っていると思われる。

①一般の連語句よりも結合度が高い。

②二つ以上の単語が決まった結び付きをしているが、それぞれの単語の意味をただつなぎ併せても理解できない別の意味を表す。

③慣用句は歴史的・社会的な価値観を表すものではない。格言とことわざとは違う。格言は人生の真理や処世術などを述べ、教えや戒めとしたような言葉で、ことわざは昔から人々の間で言い習わされた、風刺・教訓・知識・興行などをもった簡潔な言葉である。

④慣用句の多くは比較的是っきりした比喩的意味を持っている。

種々雑多な慣用句はいろいろな分類が試みられているが、その成り立ちを考えて、「連語成句的慣用句」と「比喩的慣用句」とに分けられる。

連語成句的慣用句は、「名詞＋動詞」「名詞＋形容詞」の型が多い。「馬があう」「甘い汁を吸う」「尻に敷く」「顎で使う」「嘴が黄色い」などがそうで

ある。前項に同一の名詞を用いても、後に多種の動詞・形容詞を組合せて、さまざまな意味に使い分ける慣用語もたくさんある。日本で育った人ならば、小さいときから覚えてきたので、一つの名詞から多くの慣用句を想起できるであろうが、外国語として勉強している人は、言語生活の中に出てくる慣用句を、教えてもらったり辞書で調べたりして、よく理解したうえで覚えるのであろう。

比喩的慣用句は、典型的には「～（の）よう」を伴って、比喩的表現であることを示す。例えば「赤子の手をひねるよう」「絵にかいたよう」「鬼の首を取ったよう」「歯の抜けたよう」「蜂の巣をつついたよう」「奥歯に物が挟まったよう」「水を打ったよう」「竹を割ったよう」「身を切られるよう」「火の消えたよう」「判で押したよう」「盆とお正月が一緒に来たよう」「芋を洗うよう」「大船に乗ったよう」「嚙んで吐き出すよう」「蚯蚓がのたくったよう」「紅葉のような手」「湯水のように使う」「綿のように疲れる」など。同じ人間の発想から生まれたものだろうか、中国語の中でも類似した比喩の表現がある。例：（乱得）像捅了马蜂窝似的 → 蜂の巣をつついたよう；（直率得）像竹筒倒豆子 → 竹を割ったよう；（字写得）像蚯蚓爬的似的 → 蚯蚓がのたくったよう；（花钱）像流水似的 → 湯水のように使う。「湯水」はどこにでも豊富にあるから、英米人もまったく同じ発想から「use money like water」という表現を使っている。

その外に「～（の）思い」「～ばかりの」「～ほど」という比喩的な表現もある。例：「断腸の思い」「藁にもすがる思い」「泣かんばかりの」「水を滴るばかりの」「穴のあくほど」「掃いて捨てるほど」など。

「～（の）よう」「～（の）思い」などがついていない、隠喩的に使われる慣用句はもっと大量に存在している。例えば、「胡麻をする」「鼻を折る」「空（目）を使う」「お茶を濁す」「一肌脱ぐ」「心臓が強い」「腰が高い」など。また「犬と猿」や「糠に釘」「袖の下」「コップの中の嵐」「目に入れても痛くない」など、前述の慣用句の構成形式とは違うが、内的に比喩的な表現が使われている。

3. 慣用句の翻訳には「意識」は至宝

日本語と中国語の中で発想上も表現もよく似ている慣用句は少なくない。例えば、「色眼鏡で見る」「顔から火が出る」「言葉に針をもつ」「面の皮が厚い」「手に汗を握る」「目を丸くする」などは、中国語の「用有色眼镜看人」「脸上冒火」「话中有刺」「脸皮厚」「手心捏着一把汗」「圆睁双眼」と共通するので、分かりやすい。「目を皿のようにする」「砂を噛むよう」「目糞鼻くそを笑う」は言葉の一部が違っていても、これに類似した表現があるので、「眼睛睁得像铜铃似的」「味同嚼蜡」「乌鸦落在猪身上，只看到别人黑」と、その理解も中訳もともに難しくはない。

しかし、日本人の意識構造や国民性の特徴をはっきり示している慣用句をうまく外国語に翻訳するためには、それぞれの国の生活に密着した考え方に基づく表現を捜し出さなければならない。似たような言い回しで表現できない場合、「意識」という訳し方で対応しなければならない。本文の最初に挙げた8例の訳文も、半分以上は「意識」で訳出した。日本語の慣用句などが英語訳される場合、「意識」はもっと多用されていると思う。例えば、「洋服を脱いで、浴衣一枚になって座敷の真ん中へ大の字に寝てみた」は、中国人なら誰にでもすぐに連想できる男らしい寝方であるが、英語では、「giving full freedom to my liberated limbs」（自由になった手足を十分に伸ばして仰向けに寝た）と説明しなければならない。英訳からは「大」という字のイメージは浮かばない。次に慣用句の例を見よう。

例① 「来春、大学を卒業する学生の“人間青田買い”がすでに活発に始まっているようだ。」という文の英語訳は：There are already extremely brisk purchases of unripened fruit in the shape of university student who will be graduating in spring next year. 「まだ熟していない果物買い」とうまく訳している。ほかに、「まだ青いリンゴに会社のマークをつける」という英語訳もあるが、これで、日本の「青田」を知らない英米人にもよく理解されるだろう。しかし、稲の青々とした水田という日本独特の風物から受けるイメー

ジは消えうせてしまう。中国の南方で育ったわたしは「青田」は知っているが、でも「买青田」という語は現代語としてはあまり使われていないため、「学生明春才毕业，但提前选拔、招聘大学生的活动看来已相当活跃」との説明的な意識にした。

例② わたしの目の黒いうちはそんなことは許さない。英語訳は：I won't permit such a thing as long as I live. 中国語訳は：只要我活着（眼还睁着），就不许干那种事。両方とも「生きているうちに」と意識にしている。中国語には「翻白眼」という熟語がある。《現代中国語辞典》によれば、「①白眼をむく。失望したときや憤懣やるかたない時の表情。②目を引き付ける。危篤状態になる。」という意味である。「目が黒いうち」は「翻白眼」の②の意味の反対語のようなものだと理解してよかろうが、しかし、「只要我眼还黑着」という言い方はないので、意識せざるを得ない。

例③ 彼は父親の名声の上に胡座をかいている。畳の上で生活をする日本人独特の動作「あぐら」が転義して「いい気になっていて努力，改善をしない」「のほほんとかまえていて，何もしようとしない」という意味の慣用句になっている。これも意識しかないだろう。英語訳は：He trades on his father's name. 中国語訳は：他靠着他父亲的名声，坐享其成，不求进取。

そのほか，以下の文の中の慣用句も日本人の独特な生活や発想から生まれたものだから，意識で訳出するほかはないだろう。

◇彼は人の尻馬に乗るばかりで定見がない／他老是随声附和（跟着别人的屁股转），没有自己的主见。

◇今回の事件で彼も味噌をつけた／由于这次事件，他也丢了脸。

◇彼女の猫なで声を聞いただけで虫酸が走る／只是听到她那令人肉麻的声音就叫人恶心。

◇彼には時間の観念がなく，遅れることなど屁の河童だ／他没有时间观念，迟到对他来说，只是小事一件（不值得一提）。

◇答弁に立ったが，弁慶の立ち往生になってしまった／进行了答辨，但结果进退维谷，下不了台（十分狼狈）。

◇あくまで白を切るつもりか／你打算佯装不知、装蒜到底吗？

◇彼は横車を押してその件を認めさせた／他蛮横地硬是让他承认了那件事。

◇点数に下駄を履かせてもらい、やっと進級できた／请别人抬高了分数，才好不容易升级。

その外に、「星を挙げる」「平氣の平左」「弁慶の泣き所」「露命をつなぐ」「褌を締めてかかる」「袴を脱ぐ」「齒に衣着せぬ」などのような慣用句の説明・翻訳も難しだろう。

4. 分かりやすい、親近感を覚える漢語語彙の慣用句

「漢語」は、「昔、中国から渡って来た、漢音・呉音などの漢字音からなる言葉」である。ここで言う漢語語彙の慣用句は、漢籍仏典に典拠を有し、かつ、日本の古い文献に用例の見えるものを指す。「雲泥の差」や「他山の石」「一笑に付す」「旧交を温める」「水火を辞せず」など、このような慣用句は非常に多い。統計によると《慣用句用例新辞典》にはおよそ150項前後収録してある。

その中に、現代中国語では、四文字の「成語」として、全く同じ意味に使われるものは大体80項ある。例：

A類：名詞　＋　の　＋　名詞

烏合の衆／乌合之众	雨後の筍／雨后春笋	掌中の珠／掌上明珠
竹馬の友／青梅竹马	破竹の勢い／勢如破竹	螳螂の斧／螳臂挡车
対岸の火事／隔岸观火	刎頸の交わり／刎颈之交	井の中の蛙／井中之蛙
同じ穴の貉／一丘之貉	他山の石(とする)／(作为)他山之石	

B類：名詞　＋　を　＋　他動詞

襟を正す／正襟危坐	群を抜く／出类拔萃	星を戴く／披星戴月
秋波を送る／暗送秋波	愁眉を開く／愁眉顿开	寝食を忘れる／废寝忘食
頭角を現す／崭露头角	枕を高くする／高枕无忧	

柳眉を逆立てる／柳眉倒豎

難色を示す／面现难色

薄氷を踏む／如履薄冰

九死に一生を得る／九死一生

恩を仇で返す／恩将仇报

夜を日に継ぐ／夜以继日(日以继夜)

俱に天を戴かず／不共戴天

C類：名詞　＋　が・に・で　＋　自動詞

歩調が合う／歩调一致　骨に刻む／刻骨铭心　水に流す／付之东流

胸に刻む／铭记在心　画餅に帰す／终归画餅　壁に耳あり／隔墙有耳

枚挙にいとまがない／不胜枚挙　顎で使う／颐指气使

日本語の中では漢語慣用句として使われているが、それと同じ意味で、現代中国語では「動詞＋名詞」という二文字の「詞組」の形で使っているものも少なくない。その数は50項以上ある。例：

当を得る／得当

度を失う／失度

名を成す／成名

恥をすすぐ／雪耻

幕を開ける／开幕

実を結ぶ／结果(结出果实)

涎を垂らす／垂涎

夜を徹する／彻夜

我を忘れる／忘我

舵を取る／掌舵

汗水を流す／流汗

面目を失う／丢脸

度が過ぎる／过度

壁にぶつかる／碰壁

理にかなう／合理

野に下る／下野

一再ならず／一再(再三)

漢語慣用句は次の特徴が挙げられるだろう。

①慣用句に使われている漢語は中日両国語に古くある語が多いが、慣用句の中でしか使われない漢語がある。例えば（傍線の語）：

立錐の余地がない

風前の燈

九死に一生を得る

愁眉を開く

頭角を現す

一矢を報いる

②慣用句の漢語の字数は、一字と二字のものが大多数を占めている。二字の慣用句が一字の慣用句より多い。

③漢語名詞を中心に、慣用句の構成から見れば、「漢語＋漢語」と「漢語＋和語」「和語＋漢語」の三種類がある。後項の自立語が漢語であれば、前項の自立語もほとんど漢語である。

④漢語慣用句は、中国語を母体語とする人にはそんなに難しくはないが、

前項と後項の自立語の読み方は難しい。前項は音読、後項は訓読のもあれば、逆もある。

5. まだまだ少数派にあるカタカナ外来語語彙の慣用句

日本語の中のカタカナ語は相当な数にのぼるが、今なお増えつつある勢いを見せている。普通の厚さのカタカナ語辞典には1万5千語前後（「学研・カタカナ新語辞典」）、大型のカタカナ語辞典は5万語以上も収録されている。しかし、慣用句にカタカナ語を使ったものは極めて少ない。「慣用句用例新辞典」と「慣用句の辞典」で調べたが、47語載っている。慣用句に意外にもカタカナ語が少ないことは、日本語の中でのカタカナ語の位置を反映する一つの事実だと言えよう。その数が多くないので全数写しておく。

アクセントを置く／アドバルーンを揚げる／イニシアチブをとる／エンジンがかかる（～をかける）／オブラートに包む／キャスティング・ボートを握る／コップの中の嵐／コロンスの卵／コンマ以下／サンドイッチになる／シャッポを脱ぐ／スタートを切る／ストップをかける（～がかかる）／スポットライトを浴びる／スポットを当てる／Z旗（ぜっとき）を掲げる／タッチの差／鉄のカーテン／トップを切る／バスに乗り遅れる／バトンを渡す／パンチが利く（～をきかせる）／パンチを食う／ピッチを上げる（～があがる）／ピリオドを打つ／ピンからキリまで／ピンをはねる／ピントが外れる／ピントがぼける／フットライトを浴びる／プラスアルファ／ブレーキをかける（～がかかる）／ベールを脱ぐ／ベストを尽くす／ペナントを握る／ペンを折る／ベンチを暖める／ポイントを稼ぐ／マスコミに乗る／ミイラ取りがミイラになる／メートルを上げる（～があがる）／メスを入れる（～が入る）／モーションをかける／ラストスパートをかける／レールを敷く／レッテルを貼る／ワンクッション置く／

この中で、英語から来たカタカナ語はほとんどで、フランス語は「シャッポ、メートル」、ポルトガル語は「ピン、キリ、ミイラ」、オランダ語は一番

多く、「コップ、オブラート、ピント、メス、レットル」の5語である。カタカナ語を使う慣用句にはロシア語やドイツ語などはまだ発見されていない。

以上のカタカナ語慣用句とそれ以外の慣用句とを対照・比較して気がつくことは、カタカナ語はただ名詞として使われていて、動詞や形容詞として使われている例は一つもないという点である。つまり、カタカナ語慣用句の構成は主には「カタカナ語名詞＋和語動詞」の型を取っていて、後の述語の部分にカタカナ語が現れない。カタカナ語慣用句の量が少ないことと、後項部分にカタカナ語が現れないことは、カタカナ語の入り込む程度や範囲が漢語と比べてまだ弱く狭いものだということが言えるだろう。

カタカナ語を使う慣用句には、大体同じ意味をもつ漢語・和語語彙の慣用句がある。例えば、

シャッポを脱ぐ→かぶとを脱ぐ	ストップをかける→待ったをかける
ピリオドを打つ→終止符を打つ	ピンをはねる→上前をはねる
フットライトを浴びる→脚光を浴びる	ペンを折る→筆を折る
ポイントを稼ぐ→点数を稼ぐ	レールを敷く→路線を敷く

辞典によれば、「シャッポ」はフランス語 chapeau で、帽子の意。「かぶと」のかわりに、「シャッポ」としたのだろう。「彼の頭の良さにはみんながシャッポを脱いだ」を、「…みんながかぶとを脱いだ」と言い換えて、頭にかぶる物の「形象」が変わったが、文の意味は大体同じであろう。外に「若花に脱帽」という「動詞＋名詞」の言葉もある。また、「あー、シャッポ、シャッポ」は「あー、参った、参った」という意味があるが、たぶん「シャッポを脱ぐ」という慣用句が先にあって、その簡略した言い方で、これと同じ意味に慣用されたのだろう。

「ストップをかける」も「待った」を「ストップ」にしたものであろう。でも「待ったをかける」は、勝負事で、相手が仕掛けるのを待ってもらう意から来たもので、相手のすることに対し、しばらくの間中止を求めるという意がある。「地元住民が工場建設に待ったをかける」という文を「…にストッ

プをかける」にしたら、物事が完全に停止してしまうような感じがする。

「ピリオドを打つ」と「終止符を打つ」とは意味上はほぼ同じであるが、これは「終止符」を「ピリオド」にしたものではないと見られている。先に「ピリオド」という語があって、「終止符」はその訳語として昭和時代に生まれたという説もある。また、「フットライトを浴びる」という慣用句もそうである。「脚光」は「フットライト」の訳語で、その歴史は「終止符」よりずっと古く、大正時代に生まれたと見られている。

カタカナ語の慣用句はいつ頃から使われるようになったのか、まだはっきりしない。これを解明するために多くの古い辞書を調べなければならない。《慣用句解説》によると、「スタートを切る」は1921年の《新しき用語の泉》に、「ピッチを上げる」は1934年の《新語新知識》に、「メートルをあげる」は1921年の《新しい言葉の字引》に、また「モーションをかける」は《尖端語辞典》とその後に（1932年に）出版された《モダン新語大辞典》に既に出ていて、この四句は当時使われていたという。

上述の慣用句の中、「ベストを尽くす」や「バスに乗り遅れる」「バトンを渡す」など、おもしろくて分かりやすいものがあるが、このような慣用句が増えてほしい。

6. 身体髪膚の多用で、学習者を悩ます身体語彙の慣用句

3 ページのテーマ別の表を見ても分かるように、身体の部分を使った慣用表現は驚くほど多い。人間の身体髪膚、頭のとっぺんから「足下」まで、顔、頬、眉、目、鼻、口、…手、胸、腹、腰、尻、骨、肉、気、血、脈、神経などにまで、体のすべてが慣用表現に使われているように思われる。「日常の会話や文章に多く用いられ」るのは、《慣用句用例新辞典》には747項もあり、所載の総数の38%を占める。中では、「目」の慣用句は87項で一番多い。あとは順次に「手」は72、「口」は49、「身・体」は44、「腹」は36、「顔」は34、「足」は29項と多数ある。

一般に、外界との関係の度合いが高い部分には人間の感情がよく現れる。目・口・顔は、眉・頬より外界からの刺激に対して反応しやすいので、これらの言葉で構成された慣用句も多いのだろう。

「目」には肉体的な「目」、または「視力」の意味のほかに、「注意力」「見地」「眼識」などの意味があるから、「目」を使った慣用句が多いのである。例えば、注意してよく見ることを「目を注ぐ」、先を考えて気長に見ることを「長い目で見る」、物事を判断したり見抜く能力があることを「見る目がある」、頭の中に思い描くことができることを「目に浮かぶ」と言っている。中国語の「注目」「从长远看」「有眼力」「浮现在眼前」という慣用表現もこれに似ている。中国語の中にも「目」を使った四字成語はたくさんある。例：「目不忍睹」（見るに忍びない）、「目不识丁」（目に一丁字なし。全くの文盲）、「目中无人」（眼中に人なきがごとし。傲慢で人を見下ろすこと）など。でも、口語では、四字成語以外は、「目」（mù）よりも、「眼」（yǎn）が多く使われている。

「目は心の窓」とよく言われているが、まさにそうである。怒ったり驚いたり夢中になったりした場合は「目の色を変える」、頭や顔を強打されたら、「目から火が出る」、いいものを多く見て鑑賞する能力が増して「目が肥える」、非常に忙しいときは「目が回る」、ふとしたきっかけから急に物事の真相や本質が分かるようになった譬えとしては「目からうろこが落ちる」、心を奪われて正しい判断ができなくなったら「目がくらむ」、そして好物なら、これには「目が無い」、美しいものや珍しいものを見て楽しんで、また「目の保養」になる、目の慣用表現は実に独創的でおもしろい。

日本語には「目」を使った表現が多いが、英語に訳される場合に、eye という単語が使われることは少ない。例① これに最初目を走らせた時、… → As I started reading the letter, …。例② よろけるお年寄りには目もくれず、… → not giving a second look to the old passengers …。例③ すこし長い目で、自分の生涯のこと、社会、… → with a slightly longerrange point of view about our own lives, about society …。日本語と英語の慣用表現がほと

んど一致しているものもあるが、しかし少ない。

例：あの子が目を放しませんの。→ She won't take her eyes off me.

慣用句だけでなく、「心眼」とか「開眼」などのような漢語的な言い回しを英訳にするには、英米人は我々以上に骨を折るであろう。

「目は心の窓」ならば、「顔」は人の看板のようなものと見てよかろう。人間は顔によってお互いに識別する。また、顔は心理的な表情を示す。人間である以上、嬉しいこともいやなことも、顔に表すのは、西洋人、東洋人ともに変わりはない。どこの国の人間も、顔によって相手の気持ちを判断するのに変わりはない。日本語は「顔色をうかがう」「顔色を見る」、中国語は「观言察色」、英語は「read a person's expression」、発想と表現はほとんど同じである。

「目」や「顔」と違って、身体の内面は外界と直接接触する機会が非常に少ないし、通常は身体活動として表面に現されることも少ない。そのために、目に見えるもののほうを重視されるのだろう。胃・腸・腎臓・肺などの身体語彙は慣用句にめったに使われない。

「腹」は割合多く使われている。日本語の「腹」は、日本語独特の表現を多く生み出している。芳賀矢一博士の次の言葉は、腹に対する日本人の発想をよく説明している。

「腹の中には食物を消化する胃腸がある。腹が減る、腹がふくれるは至当の事であるが、ここも感情をあらはす処と見られて腹が立つといふのは、考へれば面白い。腹に据えかねるから反対に立つのであろう。それが落付くのを腹が居るといふ。腹いせといって、日頃の無念を晴らすこともある。胆力といって腹の中の胆から元気が出ると考へたから驚くのを胆を潰すという。腹黒といひ腹がきたないといふに至っては、全く精神が腹の中に在ると考へたらしい。よく腹で味わって見ろといふのも考へて見よということである。

武士の切腹は腹の綺麗なのを開いて見せる為だといふ人もあるが、これは疑はしい。笑ふ時に腹筋を縫るといふのは実際の状態である。又腹の皮をよるともいふ。それと同じように臍で茶を沸かすといひ、又甚しく嘲り笑ふ事

を臍が西国するともいふ。」

精神が腹の中に宿るという発想は、英米人にはないだろう。

よく人の「腹」を読む政治家は「腹」という言葉を好んで使っているようだ。具体的な物事を述べて言質を取られることを恐れるのかも知れない。

「口」や「手」「足」の慣用句も面白いのがたくさんある。「口が軽い」は、中国語では「嘴轻」，英語では「be talkative」のほか，秘密が守れないという意味で have a big mouth という。しかし「口が大きい」は，中国語では「嘴大会说」，「おしゃべりが上手だ」という意味に使われている。

7. 喜怒哀楽を表す，微妙な「気」を使う心情語彙の慣用句

心情や心理を表す慣用句には，「息」や「気」「心」「腹」「頭」「額」「面」などを用いるものが少なくない。「息をのむ」「気になる」「心を打つ」「腹が立つ」「頭にくる」「額に筋を立てる」「満面朱をそそぐ」など。「気」という言葉は，日本語独特の捕らえ所のない広い概念の含まれた言葉である。「心」「息」「腹」など心情語彙の慣用句よりも遙かに慣用表現が多い。統計によると，「気」を使う慣用句は50項以上もある。

「気が気でない」「気が遠くなる」「気を楽しにする」「気は心」などの類を除いて，構成上「気」の慣用句を，大きく分けると次の三つになる。

- A 気 + が + 自動詞・形容詞
- B 気 + に + (自・他) 動詞
- C 気 + を + 他動詞

現代中国語では，「气壮山河」や「气贯长虹」「浩然正气」などという「气」を使う四字成語は少なくないが，ほとんどの「气」(qi) は気持ちや心情とは関係がない。気持ちや心情を表す語としてはよく「心」(xīn) という語を使う。「気」のある慣用句を中国語に訳す場合，その多くは「心」という字が使われる（日本語の中にも「気にかかる」「心にかかる」のように「気」と「心」が同意義に使われることがある）。例：

- | | | |
|---|------------------|-----------------------|
| A | 気が散る → 沉不下心 | 気が晴れる → 心情开朗, 畅快 |
| | 気が済む → 舒心满意 | 気が差す → 于心不安 |
| | 気が多い → 心情浮躁 | 気が重い → 心情沉重 |
| B | 気に入る → 称心, 如意 | 気にかかる → 担心, 放心不下 |
| | 気に食わぬ → 不称心; 不顺眼 | 気にする → 关心, 留心; 介意 |
| C | 気を落とす → 灰心, 泄气 | 気を使う → 用心, 留神; 照顾, 考虑 |
- その他 気が気でない → 心神不定, 稳不住神, 焦虑

「心」を使う慣用句も多いが、難解度の高い「心を鬼にする」や「心にもない」「心を入れ替える」などのようなもの以外は、大体後項の漢字でその意味が推測できる。例えば、「心が通う」「心が動く」「心が痛む」「心に描く」「心に刻む」「心に留める」「心に残る」「心を合わせる」「心を打つ」「心を奪われる」「心を許す」など。

以上、異なった言語の発想と表現を中心に、中国人学習者の目で、日本語慣用句の一般性質を探り、さらに慣用句の語彙的特徴について述べてきた。

「色を使った表現」や「動植物を使った表現」などについても検討したいと考えていたが、紙幅の制限もあって、今後の研究課題にしたい。

参 照 資 料

- 1) 《慣用句用例新辞典》あすとり出版
- 2) 《慣用句の辞典》三省堂
- 3) 《慣用句解説》(宮地 裕)
- 4) 《現代日漢大辞典》商務印書館・小学館
- 5) 《辞林 21》三省堂
- 6) 《日本語と英語》サイマル出版会
- 7) 《英語表現辞典》三省堂
- 8) 《現代中国語辞典》光生館
- 9) 《精選国語辞典》明治書院